



HFHI Newsletter

ハビタット・ジャパン ニュースレター

第25号 2012年4月発行

東北の現場から

被災住宅の修繕支援プロジェクトが本格始動。

岩手県大船渡市では2月、被災した個人宅の修繕を支援する事業を本格的に開始しました。工事費の一部を補助することで、風雨や寒さをしのぐための応急修理や、仮設住宅を出て一日でも早く自宅に戻ることを希望する被災者の自立をサポートしています。

「ようやく安心して暮らせる。」

自宅が被災した森さん一家も今回、ハビタットから支援を受けた世帯の一つ。家そのものは高台にあったので津波の被害こそ免れましたが、地震による損傷がひどく、家の土台の一部も15cmにわたって傾くほどの有様。しかし、住宅の被害認定は「半壊」だったため、仮設住宅に入ることも、十分な公的支援を得ることも難しい状況でした。森さんはそれでもなんとかやりくりをして被災した家に住み続けていましたが、いつまた来るかもしれない地震を前に不安は募る一方。震災前に家のローン返済を終えたばかりということもあり、これ以上の修繕をすべきかどうか悩んだと言います。しかし、心臓を悪くする父親のためにもこのままではいけないと、ハビタットの支援も活用し、土台から柱ごと持ち上げ、床、

壁、屋根など主要部分すべての修繕に踏み切りました。現在、工事は完了し、「ようやく安心して暮らすことができる」と言えるところまで状況は改善しています(右写真)。

戸別訪問で修繕ニーズ掘り起し

2月までは、地元の新聞紙、情報誌、ラジオ放送等のマスメディアや、市役所や集会所、コンビニ等の案内掲示板を活用した広報活動を行ってきました。しかし、被災者の中には様々な理由から、「新聞やラジオに触れる機会がない」、「集会所の掲示版を見ることができない」など、支援は必要だがその情報を知るに至っていないという世帯が少なからず存在することが判明。より

細やかにニーズを見つけ出していくため、戸別訪問の方法でアプローチすることを決定しました。作業は地元大船渡のボランティアにも呼びかけながら実施し、最終的に600世帯を訪問。ポスティング(支援チラシの配布)しながら支援内容の説明を行うと共に、住宅



関係の相談を受けて回りました。結果、42世帯が新しく支援を受ける候補世帯として登録されました。現地ではまだ、支援のことは知っているが自分には資格がない(実際にはあるのに)ないと思い込んでいる世帯、またもともと遠慮を感じて申し込みができないいる世帯なども残っており、引き続き支援の周知を図っていく計画です。

大船渡市は岩手県内でも住宅被害の割合が大きかった自治体の一つ。現在も、割れた窓や穴が空いた壁や床を、ブルーシートやベニヤ板等で補強して生活せざるを得ない状況がある中、応急修理に関する公的支援は昨年終了し、その後状況を改善する善後策も打ち出されてない実態があります。ハビタット・ジャパンは、(特活)ジャパン・プラットフォーム等との協力の下、今年夏までに100軒以上の修繕完了を目指し活動しています。



被災した住宅の修繕を考えている方へ
【お問い合わせ】
TEL: 010-21-47-4100
E-mail: hfhi@habitat-japan.org



東松島市宮戸地区。以前は漁業が盛んで海が脈わいを見せる町でした。震災後、津波の被害を免れた数隻のボートで漁を再開したものの、漁具を保管する倉庫すらない状態。そこで、コンテナを食料として使っていくことになりましたが、「かつての美しい海の風景を忘れてほしくない」という地元の声に応え、そこにペインティングをしてみました。子供たちが喜び海水浴をしている光景を、復興への祈りを込めて描いていきました。宮城県では今後も、コミュニティの再建支援に重きを置き、被災者が自宅に戻った後も安心して暮らせる環境の実現を目指します。

イベント報告

東北支援やユース活動をベースに、さらなる広がりを求めて。

3.11メモリアル式典

1年目の節目を目前に控えた3月3日、東京都内で、「東日本大震災メモリアル式典」を開催しました。

式典には、ボランティア参加者やドナー、支援関係者ら約120名が出席。2011年度の活動報告ならびに2012年度の活動計画を発表すると共に、活動に貢献した個人や企業に対して感謝の意を表しました。

また、地震発生時刻の14時46分には全員で黙とう。次いで、被災地からのメッセージとして、ハビタットの支援を受けた被災者

の震災体験が共有されましたが、会場では、震災が奪ったものの大きさを改めて感じ涙する姿も見られました。

同様に、現場の声として、この1年を通じてボランティアリーダーを務めてきた市川なつきさん(京都外国语大学4年)がスピーチ。「私は今でも『忘れられるのが何よりも恐い』と話してくださいました。方の涙を忘れることができません。まだ支援を必要としている人々がいる現状を、東北から離れて住む私たちは絶対に忘れてはいけません。1年前

に世界中が抱いた被災地への想いをもう一度心に思い描いてみてください。私たちの気持ちを、力を東北へ。支援をここで終わらせてはいけません。」

この日をきっかけに思い返す「被災地への想い」。会場では式典終了後も、それぞれの立場からできる貢献の仕方について意見交換が行われていました。

「ハビグラ」開催

卒業シーズンを迎えた3月。ハビタット・ジャパンの学生支部を卒業するメンバーを囲み、「Habitat Graduation Ceremony」(通称ハビグラ)を開催しました。

卒業式というスタイルで実施したのは今回が初めて。17日に開西(北新地)、18日に開東(恵比寿)で開催し、卒業メンバーを中心に、現役生やOB・OGを含む総勢70名が駆けつけました。

それぞれが4年間の活動を振り返る中、多くのメンバーが、「ハビタットで培ったこのかけが

えのないつながりを社会人なっても絶やすことなく、活動をずっとサポートしていくためにはどうしたらよいのか」と、終始ハビタットについて議論する姿が印象的でした。

会の終盤には、ハビタット・ジャパン事務局から、その貢献に対して感謝状を贈呈。受け取った卒業メンバーは、「とてもうれしいです。振り返れば、もっと多くのことができたのではないか」という気持ちもありますが、その思いは後輩たちに託していきたいと思います」などと話してくれました。

【ハビグラを企画して】

小松沙耶さん(立命館大学学生支部元代表)
今回ハビグラを開催して、やはり今後、私たち卒業生がどうハビタットの活動を支えていくかという点がとても大切になるということを改めて感じました。お互いのつながりをより深め、ハビタットの可能性を広げていければいいと思います。

スリランカ人道支援

紛争が終結し、数十年ぶりにふるさとへ帰還してきた国内避難民のために、昨年4月以降、スリランカ北部のマナー県で、住居建築を通じた再定住支援事業を行っています。2月末には86軒目の家が完成。現在、100軒という大台に向けて取り組んでいます。

建築サイトで住居完成セレモニー

3月19日、昨年9月から69軒の住居建築を行ってきたワッタカンダル村では、その完成を祝う式典が開催されました。ハビタット関係者、都長や村長など主な行政関係者、そして69のホームオーナー一家族が見守る中、最初にハビタット・ジャパンのスタッフが挨拶。ホームオーナーの建築作業への参加・貢献に感謝を述べると共に、「これから、それぞれの家族が、自立のための基礎としてこの家を活用していくってほしい」とメッセージを送りました。その後、家々を回り、記念のテープカットを実施。念願の鍵を手にしたホームオーナーのラザック(Razak)



さんは、「やっと村に戻ることができただけじゃない。こうして立派な家が建ち、安心して暮らせるようになった。それに(家が建って、)内戦でバラバラになってしまった昔の友だちや知り合いも帰ってきて再会できた。本当にうれしい」と話してくれました。

支援の効果で、村では電気も開通

もともとワッタカンダル村は、紛争によってすべてが失われ、荒地と化した場所でした。それが現状、ハビタットの支援により、村の一部に電気が通るまでに変貌を遂げつつあります。通常、電気は、人々の再定住環境が整った地域で導入されることが多く、まさに今回の支援がもたらした成果の一つ。これを呼び水にさらに帰還が進めば、より発展的なコミュニティ形成が行われることも期待されます。

同村では現在、引き続き(特活)ジャパン・プラットフォーム(JPF)の協力を得て住居建築を実施。今後はこれと並行し、建築後のコミュニティ支援も視野に入れた活動を行っていきたいと考えています。



参加者募集中！

世界中のボランティアがこの夏、スリランカに！

世界中のボランティアが参加し、数十軒の住宅を一気に建築するハビタットの独自プログラム「Big Build」。今夏は、親日国で、また現在ハビタット・ジャパンも事業を実施するスリランカで開催されます。建築サイトは海沿いの町ニゴンボ(Negombo)。貧困や災害から立ち上がりろうとしている家族、そして世界中から集まる300人のボランティアと一緒に、今しかできない経験をしてみませんか？！

★おすすめポイント★

・日本だけでなく世界中のボランティアが集まるので、いろいろな国の人と友達になれます。

・ビーチリゾートとしても名高いニゴンボ。自由時間はビーチでのんびり。疲れたからだをリフレッシュできます！

【日程】8月5日(日)～8月11日(土)

詳細はホームページにて



Japan Hope Builders 活動報告

洪水の爪あと残るタイ中部パトゥンタニ、そこでチームが建てたのは希望。



タイの首都バンコク郊外のパトゥンタニ(Pathum Thani)で3月4日、ハビタットが「地球の歩き方」と共同で派遣する一般募集チーム「Japan Hope Builders」(計12名:大学生10名、社会人2名)が住居建築活動を終了しました。パトゥンタニは、昨年の洪水で最も被害を受けた地域の一つ。現在は平穏な日々を取り戻していますが、家の外壁などには腰の高さまではあろう水の跡が色濃く残っています。参加者は、初めこそ被災地での活動に緊張の色を見せっていましたが、ホームオーナーのジン(Jing)さん一家と現地の人々の明るい笑顔に迎えられ、1週間の間、素晴らしいチームワークを發揮し作業を進めてきました。

【活動に参加して】前畠大地さん(大学2年生・男性)

建築作業も大変でしたが、何よりも、私たちが建てた家を見て喜んでいたジンさんの笑顔が忘れられません。多くの日本人にとって家は身近過ぎて、その大切さを見落としがちですが、人が生きていく上で本当にかけがえのないものだと感じました。今回、世界の貧困問題について知りましたが、同時に、洪水の跡を見て日本のことを思い、今後はもっと東北の被災地のためにも取り組んでいきたいと考えるようになりました。

ハビタット・ジャパンでは今夏も、Japan Hope Buildersのタイ・パトゥンタニ派遣を予定しています(次ページの募集案内参照)。

ハビびと



初めは、「自分でここまでできるとは予想していなかった」と語るのは、ハビタット・ジャパン関西大学学生支部「マスター・ビース」の初代代表、吉田裕哉さん。現在、食品メーカーに勤務する傍ら、このゴールデンウィークにフィリピンで海外住居建築活動(Global Village、以下GV)に参加する。自ら結成したチームには、同支部のOB・OGや現役生、ハビタットの活動に初参加の社会人や大学生までが加わる。通常、一つの支部の中だけでチー

吉田 裕哉さん

ハビタット・ジャパン学生支部卒業生チーム代表

ムを作ることの多いGV。社会人がリードするというだけでも異例なのだから、このチームはもっとすごいということだ。

チーム結成のきっかけは、社会人1年目の時にOBとして参加したマスター・ビースの合宿。「学生の時、たった1、2週間のGVのためにみんなで必死で頑張った。その気持ちを取り戻したい」と感じた。そして、そう思った翌日にはすでに動き出した吉田さん。しかし、なにせ社会人は忙しい。最初はみんな腰が重く、メンバーは集まらなかった。

「それでも諂ひめずに続けられたのは、今までの経験があったから」。マスター・ビースを設立した時、1ヶ月間、学校でピラを配り続けた。一人だけのことでもあった。そうして配ったピラは1,000枚。また写真展を開いた時も、

来場者が少ない日は“歩く写真展”と名付けてパネルを自ら持て歩き回った。「やりたいと思ったらまずは発信すること。行動すること。そうすると自然に人が集まってくる。」

今回もOB・OGのメーリングリストで呼びかけるなどして、1年越しのGV実現となった。メンバー集めで一番役に立ったのは、「確実に友達のつながり」だったという。現在、そのつながりは18人の輪になった。

みんなに「前を向いてほしい」と吉田さん。「誰もが人に必要とされたいと感じていると思う。ただそれを仕事で感じられない人もいる。GVで仲間と一緒にあって人のために体を動かして汗を流して、自分自身でそれを感じてもらいたい」。帰国後の報告とチームが秘める今後の可能性が今から楽しみだ。

インターン紹介！

こんにちは。2月21日から1ヶ月間、ハビタット・ジャパンの大船渡事務所でインターンをしていました、ハビタットAPU(立命館アジア太平洋大学)の小西永里子です。

現地では、事務所での資料作成や電話・訪問者対応、実地調査やボスティング作業など、様々な仕事をお手伝いし、多くのことを学びました。例えば、実地調査の際、外観は普通の家なのに、家の中は被災時の姿のままで、修理もできず2階部分でなんとか暮らしているという世帯がありました。市内では瓦礫もほとんど撤去



チームのムードメーカーとして活動した小西さん(写真右)

されてきれいになりましたが、本当の復興というのはまだまだあることを痛感しました。

また、スタッフの皆さんと共にしたことも貴重な経験でした。事務所では、スタッフの方同士が、素人には一見些細だと思えるような小さなことでも、本気で意見を戦わせる白熱した場面もあって、最初は驚きました。でもそれは、常に被災者と向き合い、心から被災者のことを考え続けるプロの姿勢で、NGO活動の在り方というものを思いっきり見せつけられる瞬間でした。

これから大学がある大分県に戻り、APUの中で今回の経験を伝え、九州発の貢献の仕方をみんなで考えていくべきだと思っています。

海外ボランティア募集中

今夏もタイのバンコク郊外で住居建築活動を行います。貧困や災害で苦しむ現地住民のために、その家族と一緒に協力し合って家を建てていきます。ワークは安全基準をクリアした建築現場でのみ行いますので、建築経験やスキルは一切不要です！



ワークの他にも孤児院、幼稚園または小学校を訪問し、現地の子供たちと交流する他、バンコク市内観光、最終日にはお別れパーティーなども予定。あなたも国を越えて現地の人たちと共に汗を流し、異文化に触れ合いながら、世界の現状を学ぶ活動に参加してみませんか？詳しく述べはホームページで！

東北ボランティア募集中

現在、災害ボランティアの募集を行っています。1日からの参加が可能。特別な技術や専門性も不要です。

活動地域：

宮城県石巻市、東松島市
周辺の地域



活動内容：

主に公共施設や個人宅の修繕(壁・床はがし、泥のかき出し作業など)、コミュニティスペース等の建設や塗装、仮設住宅内での交流スペースの提供・参加など。

活動日程：

随時お申込みを受け付けています。
詳しく述べはホームページで！

編集後記

先日、本誌でも取り上げるスリランカとタイに出張しました。両国とも今から8年前、インドネシア・スマトラ島沖地震に伴って発生したインド洋大津波によって被災。それ以降も、スリランカは紛争に苦しみ、タイは昨年、洪水被害に悩まされました。また、奇しくも本誌の作成中、スマトラ島沖でM8.6の地震が発生。日本全体がその動向を、固唾をのんで見守りました。

震災から1年。被災地の復興はまさにこれからですが、ボランティアに加え、現地で活動する団体の数もすでに減少傾向にあります。このように大規模な災害が多発する中で、息の長い支援を行っていくためにはどうしていくべきなのか。それぞれが、この節目を機に改めて考えていかなければならない時期に来ているように思います。(事務局)



Tel: 03-6459-2070 / Fax: 03-6459-2071
URL: www.habitatjp.org / Email: info@habitatjp.org

発行人：小田 浩
編集人：山崎順太郎、山本真太郎、中川ミミ

ハビタット・フォー・ヒューマニティ・ジャパンは、住宅を建てることでコミュニティを築く自立支援型NGOとして、これまで、人種、宗教、国籍に関係なく世界約100カ国で50万軒余の住宅建築支援を行ってきました。そして現在、世界中で21分に1軒のペースで住宅を建てています。